

能と能面

大谷 節子

一

能と能面の関係は、どれほど不可分で本来的なものであろうか。それは、能がどこから生まれたのかという問いを立てるに等しく、難問である。現在、能の家が最も神聖視する面は翁面であるが、翁芸の発生が未だ解明されていないように、翁面がいつ、いかにして創造されたのか、答えはまだ見えていない。

翁および翁面の発生に関する最新の論考に、天野文雄氏「能の『翁』はどのようにして生まれたのか——『翁』以前の「翁」をめぐって——」、松岡心平氏「翁芸の発生」^①がある。

天野氏は、多武峰常行堂修正会に関する資料『常行堂三昧儀式』^②の検討を通じて、申楽の翁面は摩多羅神の表徴として生まれたとする自説（「翁猿楽の成立——常行堂修正会との関連——」『文学』一九八三年七月号）を撤回し、「翁」を摩多羅神とは別個の存在と断定した上で、翁面については、表章氏が紹介された法政大学能楽研究『究所観世新九郎文庫蔵『享禄三年二月奥書能伝書』』に見える「此メシノナラバソメント申也」の「ソメン」に祖面の字を宛て、祖先面

かと推測する。

松岡氏は、阿部泰郎氏によって紹介された真福寺大須文庫蔵『中堂咒師作法』他の資料によって、修正会・修二会の場合において、結願の追儺で龍天・毘沙門天を演じていた咒師猿楽と共に後戸において乱声を担っていた下臈猿楽は、猿楽の芸を演じ、追儺では追われる鬼である毘那夜迦の役を勤めていたこと、この下臈猿楽の流れを汲む猿楽の座が鎌倉末期成立の『住吉太神宮諸神事次第』において翁面と呼ばれている点に着目し、鎌倉期には猿楽の座の表芸は翁になっていったとして、翁に毘那夜迦の荒神的性格を見る。

多武峰の常行堂三昧儀式は摩多羅神を対象とする法会であり、翁面は摩多羅神ではないという天野氏の読みは、高橋悠介氏が疑義を呈するように^③、多武峰常行堂においては翁面が摩多羅神と呼ばれている事実もまた看過し難いが、法会の資料が示す限りにおいて妥当な結論と思われる。しかし、「そめん」に祖面の字を宛てて翁を祖先神とする結論は、祖先神を「そめん」と呼ぶ例がなく、後世の解釈の域を出ない。下臈猿楽が追儺で鬼面を着した毘那夜迦の役を担っていたという松岡氏の指摘は、猿楽と鬼、そして鬼面の関係を解き明かす画期的なものである。しかし、氏も指摘するように、毘那夜迦から翁芸と翁面の発生にいたる過程が未解明の領域として残されている。

二

翁面はどこから来たのだろうか。『申楽談儀』第二十二段冒頭に示されるように、

一、面めんのこと、翁は日光うち、弥勒打て也。此座の翁は弥勒打也。伊賀小波多にて座をたて初められし時、伊賀にてたづね出したてまつし面也。〔『申楽談儀』二十二段^④〕

観世座の翁面は、座の建立時に伊賀の地からもたらされたことが語り継がれている。同書第二十三段には、近江猿樂上三座の山科が申楽の家となった始原説話として、

近江は、敏満寺の座、久座也。山科は、山科と云所の悴かぜ侍なりしが、敏満寺が女むすめと嫁して、申楽に心ざして、山科の明神、春日にて御座敷、籠て進退を祈る。烏、社壇の上より物を落す。見れば翁面にてまします。此上はとて申楽に成る。嫡子をば山科に置き、弟をば下坂に置き、三男をば日吉に置く。其より三座の流れと成。然共、山科総領なれば、日吉の神事、今に正月朔日より七日に至る迄、山科独して翁をす。彼面也。

山科の悴侍であった男が山科の春日明神に参籠し、使しめの烏が落とした翁面を入手したことが立座の契機として記されており、右はいずれも座の建立と翁面の取得が一体の事柄として説かれている。最も古い来歴を説く座は円満井座(金春家)であるが、『風姿花伝』第四神祇云には、

上宮太子、天下少し障りありし時、神代・仏在所の吉例に任て、六十六番の物まねを彼河勝に仰せて、同じく六十六番の面を御作にて、則河勝に与へ給ふ。(中略)村上天皇、申楽を以て天下の御祈祷たるべきとて、その頃彼河勝この申楽の芸を伝る子孫、秦氏安なり。六十六番申楽を紫宸殿にて仕る。(中略)その後、六十六番までは一日に勤めがたしとて、その中を選びて、稲経の翁翁面、代経翁三番申楽、父尉、これ三を定む。今の代の式三番、是也。則、法・報・応の三身の如来をかたどり奉る所也。式三番の口伝、別紙にあるべし。(中略)秦氏安より、光太郎・金春まで、廿九代の遠孫なり。これ、大和国円満井の座也。同じく氏安より相伝たる聖徳太子の御作の鬼面、春日の御神影、仏舍利、是三、この家に伝る所也。

聖徳太子から六十六番の面を与えられ紫宸殿で六十六番申楽を勤めて天下を平かにした秦河勝を、本邦における申楽の始祖と仰

ぎ、その子孫で、同じく紫宸殿で六十六番申樂を勤めたとする秦氏安を、円満井座の遠祖と位置付ける。氏安は実在が確かめられない人物であるが、この氏安の後に六十六番申樂を縮約した形として、式三番（翁面・三番叟・父尉からなる古態の翁芸）の起りが説かれている。

「その中を選びて」なる記述は、秦河勝が行った六十六番申樂の中に、既に稲経翁（翁）、代経翁（三番叟）、父尉が含まれていたこと、そして、この三つが六十六番申樂を代表する申樂であったことを説こうとするものである。もとより翁芸が飛鳥時代に溯ることは信じるに足りないが、『風姿花伝』第四神祇云では、翁そして翁面が本朝における申樂の起源と共に語られていることが注目される。

金春家の場合、秦氏安より伝来の三つの家宝に含まれているのは翁面ではなく、鬼面である。しかし、禅竹は翁面を秦河勝六十六番申樂ゆかりの太子作鬼面と一体のものとして説いていく。

翁ニ対シタテマツテ、鬼面ヲ当座ニ安置シタテマツルコト、コレヲ聖徳太子御作ノ面也。秦河勝ニ猿樂ノ業ヲ被仰付シ時、河勝ニ給イケル也。是則、翁一体ノ御面ナリ。諸天・善神、仏・菩薩ト初メタテマツリ、人間ニ至ルマデ、柔和・憤怒ノ二ノ形アリ。コレ、善悪ノ二相一如ノ形ナルベシ。サルホドニ、降伏

ノ姿、怒ル時ニハ、夜叉・鬼神ノ形ト現ワレ、柔和・忍辱・慈悲ノ姿ヲ現ワス時、面貌端嚴ニシテ、本有如來ノ妙体也。然者一体異名ナリ。

（『明宿集』）

こうやって禅竹が、柔和・忍辱・慈悲の姿を現す翁面と、降伏、憤怒の相である鬼面を善悪二相一如と把握したことを起点として、金春家の翁面は、鬼面に同じく太子作面となり、秦河勝の六十六番猿樂以来の面として位置付けられていくのである。

面の出所を天や海中、川上など異界とするのは、面の神聖性を語る話型の常套であるが、座の建立と翁面の取得を一体の現象として説くこれらの伝承は、つまりは翁芸が猿樂の座にとっての根本であることを主張しようとするものである。しかし、ここからは、翁面の創成が猿樂の座成立以前に溯り、金春家の場合も、これを円満井座の遠祖秦氏安伝来の家宝の鬼面と二相一如の面と位置付けることで、翁面を座の根本面と説こうとした意図を読み取らざるを得ない。民俗面を含め現存する鬼面が多様性をみせる一方で、翁面は顔の輪郭や皺の形状、髭の描き方に多少の変化は認められるものの、円満の相好と切り顎と眉に一定の様式性を備えている。この現象は、猿樂の座が翁を表芸にする以前に、既に翁面は存在していたことを示唆しているのではないだろうか。

では、それは一体何を表象するものとして造型されたのだろうか。五穀豊穰寿福円満を願ひ、これをもたらす存在、寿命長遠天下太平を祈禱し、これをもたらす存在、これらの主客一体の存在に誰が形を与えたのだろうか。

三

修正会・修二会の場合が翁形成の母体である一方、地方の村落で伝えられてきた翁面は、これを祀る人々の豊作、祈雨止雨、そして疫病や疱瘡除けなど、現実的で具体的な祈願の対象であり、担い手である^⑤。

次に引用するのは、京観世五軒家の一である岩井七郎右衛門家四代、岩井直恒（享保十三（1728）〜享和二（1802））の書き留められた翁面に關する湖東の言い伝えである。

安永六酉二月始ノ比ヨリ江州坂田郡長浜近キ浅井郡醍醐村ヨリ草野寛治殿ト云人、医道執行ノタメ在京有リ。謡モ執心ニテ毎日此方へ稽古ニ見へ候。四月上旬稽古ニ来リ合セ候折柄、桔梗や武助殿懇意之小兒トテ此方ニ有之。神面頂戴之事ヲ押掛ケ頼マレ、此節世上ニ疱瘡大ニ流行故、別日ニトモ申難ク頂戴濟。序ニ武助殿も拝見ノ望ニ付、右寛治殿も相伴シテ甚敬信ノ

趣キ。其後、寛治殿、物語リ左ニ記。

同国長浜ヨリ良六里計山中ニ上津原村有。家数五百軒斗也。此所ノ神社産神此神体翁ノ面ニテ、其余七面、都合八面有。其内ニ随一タルモノ、翁ノ面タルヘキカ。所ノ人ハ三番面ト云ト也。其余七面ハ何タル事ヲシラズトナン。古来ハ拾二面有之。皆一箱ニ入りシガ、いかやうに入置候ても三番三面ハおのれと上へ出しと云伝ふ。しかるに中昔、諸人結縁のためにとて柏原より憑にて、則柏原上菩提院^{ジヨボタイキン}へ貸シ遣ス。此時四面ヲ上菩提院ニ留メ返サズ。しかりし已来、八面となる。扱、此面ノ靈験タル事ハ、雨乞也。毎度奇瑞違ふ事なし。古ナル哉。今ハ九拾歳ノ村老ノ云、我若かりし時ハ、雨乞の返しとて、村落の老若、日を定、酒を汲、右三番三面及七面ども人前ニ着テ踊リ、悦をして其後、面を神殿に納し事なるに、先年、衆中の内ニ、大キニ崇りを蒙り、三四人即座ニ絶倒し漸氣起リ罵口ばしり、無礼不敬之事々同音ニ云い終テ、死タル如ク数刻熟睡し、其後各正氣となる。夫より恐レ敬ひ御詫御湯をさ、げ、又、一面々々ニ箱を寄進ス。惣而此村ハ山中タルニヨツテ、人性至テ律義也。誠神ハ敬ふによつて威を益とかや。尊敬にしたがひ弥奇瑞をそへたり。

右、雨乞の時は、此村に池アリ。此水モ湖に落ル。池中に平面ナル大石有。此所を俗呼で面洗湖^{メシアラヒア}と云。平面石の上へ八ツ

ノ面を並べ、笹ノ枝を以て此面ノ上へ少水をそ、げバ、暫時之内ニ雷雨をなす事うたがふべからず。八十年前、寅年兩年打続、諸国大旱魃ス。此時、兩度此面を出し、例のごとくせしに、忽近在八九里潤ス程ノ大夕立有。二度目ハ三里斗雨ふりしと。尤兩度とも上津原ハ大雷鳴也。右之時、雨乞ノ返しにハ、御湯を捧、一村老若男女神前にておどりなどして悦しと也。中に、三番叟の面を着てなど云事ハおもひよらず。昔はけしからぬ事にて有しとこそ噂して濟ませしと也。

又、長浜ニ應長院大通寺と云、京六条門跡ノ連枝と云テ、貴僧まします。十七八年前末寺より招待ニヨツテ末寺廻り有しに、此供奉に宇野孫助と云人有。此男ハ長浜ミツヤ町ニ根ヲヒノ人にて、身上向モ厚ク乱舞にも心懸ケ有人ゆへ、彼上津原ノ神面拝見ノ望有によつて、兼て應長院へ内々を申込、序ニ拝見をと心に工ミ、上津原に余儀成がたき手筋を頼に、無程遂行の折節、應長院御拝見并孫助も拝見之所、此時ハわけて神のいのりも強かりしにや、忽雨ふり出し、雷鳴頻りゆへ、誠に拝見ニ及ばず納めしと也。夫より應長順行有しに、近在には御もてなしに、若者ども相撲ノ場所を儲置しも、右ノ大雨にて無益となり、皆々腹立せしと也。但シ、門徒の衆ハ時として降り雨といへども、それとばかりも申がたき趣にて有し由、是等廿ヶ年来之事は正しく寛治殿見請し異驗給也ト。則、此應長院ハ當時之

現住也。

直恒思フニ、右上津原ノ神面ハ、楽面ニテ有べし。但シ、三番三面と云ハ、翁ノ面ナルベキカ。此村大キニ古キ所にて、年数しれぬとの事也。
(岩井直恒筆「覚書」大西家蔵)

江州浅井郡醍醐村の出身で、医者修行のために京に遊学し、毎日直恒の下に通つて謡に親しんでいた草野寛治が、安永六年(1777)四月の或る日、直恒に語つた話である。湖東は謡が盛んな土地であり、岩井七郎右衛門家に同じく京観世五軒家の一つであった井上次郎右衛門家の神文帳^⑥にも、長浜在住の門人が多く名を連ねている。この日、直恒の家を訪れた小童が持ち込んだ「神面」がどこの所蔵の何の面であるかは不明であるが、居合わせた寛治が、この神面を拝した後で翁面の話をしていことから、翁面である可能性は高い。現在も翁面の願掛けの中に疱瘡除けがある。

寛治の話によれば、郷里長浜の北東山中にある神津原の産神社にはご神体の翁面一面を含む八面が所蔵されており、在地の人々はご神体の翁面を「三番叟面(さんばそめん)」と呼んでいる。以前は十二面あり、十二面全てを一箱に納めていたが、この「さんばそめん」はどれほど下の方に置いていても、次に開けると必ず一番上に在つたという。現在失われた四面は、柏原の上菩提院へ貸した折に、返却されぬままだが、残つた八面は雨乞いに靈験があらたかで、古老

の話では、その昔、雨乞のお札に村中で酒を酌み交わし、八面を「人前二着テ踊り」神殿に納めた後、三四人が祟りを蒙ってより、一面一面に箱が寄進された。雨乞の時は、村の池の中にある「面洗測」と呼ばれている平らな大石の上に八面を並べ、笹の葉で水を注ぐと、時を置かず雷雨になるという。

現在も、甲津原天満宮には十面が所蔵され、昭和四十八年に伊吹町指定文化財に指定されている。明治初年の合祀以前は、春日神社の所蔵であった由である。興味深いのは、私たちが調査を行った二〇〇六年十一月三日に、当時の甲津原区長であった高橋忠雄氏から、ほぼ同じ話を聞いたことである。その当時は直恒の『覚書』の記事に気付いておらず、後にこれに接し、伝承の生命力を再認識した。同社所蔵面の中では悪尉面がよく知られているが、十面の内、一面は吽形の追儼面である。翁面の他に三番叟面も含まれているが、他の面に比して時代が下るため、これは後に補完された可能性もある。すれば、明和六年時の八面は吽形追儼面と三番叟面を外したもののかもしれない。

翁面を三番叟面と呼んでいること、翁面が雨乞を含め農耕儀礼とその信仰に深く関わっていることは、訛伝や民間伝承への変様として処理してしまえない要素を持っている。猿楽が修正会、修二会における辟邪の儀礼に関わり、追儼において毘那夜迦という追われる鬼の役を担っていたことが明らかになった現在、翁と翁面が持つ謎

は深まっている。翁面がどこからやってきたか、その淵源はまだわかっていない。

能面の創出と派生の問題を考えていくと、翁面の持つ特異性が謎として浮上する。能面と翁面の間にある断層は、猿楽と翁との関係を暗示しているように思われる。

〔注〕

- ① いずれも、『能を読む』① 翁と観阿弥 能の誕生（角川学芸出版、二〇〇三年）収載。
- ② 福原敏男『祭礼文化史の研究』（法政大学出版局、一九九五年）に翻刻。
- ③ 『禅竹能楽論の研究』（慶應義塾大学出版会、二〇一四年）。
- ④ 以下、世阿弥、禅竹の伝書の引用は日本思想大系『世阿弥 禅竹』に拠るが、一部、表記を改めた箇所がある。
- ⑤ 宮本圭造「願掛けの翁舞（一）（二）」『金春月報』二〇〇七年三月・四月号）
- ⑥ 法政大学能楽研究所蔵。拙稿「京観世井上次郎右衛門家門人帳」解題と翻刻 附索引」（『山手日文論攷』二十六号、二〇〇七年三月）、「京観世井上次郎右衛門家門人帳（田中家引継分）」解題と翻刻 附索引」（『神女大國文』十九号、二〇〇八年三月）に翻刻。